

自己評価報告書

平成23年 5月11日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20320054

研究課題名(和文)

境界の消失と再生－19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学

研究課題名(英文) The Disappearance and Reconstruction of Borders in European and Anglo-American Literature from the Late 19th Century to the Early 20th Century

研究代表者

西川 智之 (NISHIKAWA TOMOYUKI)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：20218134

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：英米文学、独文学、仏文学、総合芸術、ジェンダー、ユダヤ性、モダニズム

1. 研究計画の概要

本研究は、19世紀後半から20世紀前半の欧米の文化・芸術を「境界の消失と再生」という観点から、文学作品を中心に検討しようとするものである。本研究には9名の研究者が参加しており、それぞれが以下の大きな三つのテーマのひとつを分担して研究にあたっている。

- 1) 民族の境界の消失と再生－ユダヤ人文学を例として
- 2) 「男性－女性」の境界の消失と再生－イギリス文学・アメリカ文学を中心に
- 3) 芸術の境界の消失と総合芸術－音楽、美術、舞踊、芸術誌を例として

そして上記の研究を総合化することで、19世紀後半から20世紀初頭の欧米社会が、近代から現代へと変貌していくその姿を浮き彫りにしたいと考えている。

2. 研究の進捗状況

19世紀後半から20世紀初頭にかけての欧米文化はそれまでの伝統を否定し、芸術の自立を謳い、さまざまな「イズム」を展開していった。抽象主義絵画やダダイズム運動、あるいは無調性音楽に見られるように、絵画や文学、あるいは音楽の個々の要素の極限を探求し、それぞれの芸術領域を先鋭化していく一方で、美術や音楽、文学など、さまざまな文化・芸術の境界を越えて新たな芸術作品を生み出そうとする動きもあった。

研究計画の概要にも書いたように、本研究は民族の境界の消失と再生、「男性－女性」の境界の消失と再生、芸術の境界の消失と総合芸術という三つの大きなテーマを立てて、上記のようなさまざまな姿を見せる19世紀

後半から20世紀初頭の文化・芸術に通底する芸術観・価値観を探ってきた。こうした新たな動きには、アフリカの土着文化への関心やジャポニスムなど、ヨーロッパ文化圏外のもの大きな影響を与えたことも、過去3年の間に行ったシンポジウムなどを通じて分かってきた。

19世紀末には各地で芸術誌の創刊が相次ぎ、芸術・文化面での大衆の啓蒙が目指され、実際『ユーゲント』誌のように驚異的な部数を記録する雑誌がある一方で、たいいていの芸術誌は部数が伸びず、数年後には廃刊となるものがほとんどだった。こうした芸術誌を見ると、大衆の啓蒙が謳われる一方で、大衆とは無縁な高踏な内容も目立ち、その後の20世紀初頭の、時には相反するよう見える文化・芸術運動が凝縮されているのが分かる。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

〔理由〕

予定していた一次資料の収集も順調に進み、収集した資料などを中心とした研究を各自行い一方で、過去3年間に行ったシンポジウムや講演会などを通じて、各自の研究領域以外の知識を得ることもできたため。

4. 今後の研究の推進方策

一次資料の収集を続けると同時に、そうした資料の分析を進めながら、上記のような一見対照的ともいえるような現象の根底には何があったのかを、これまで同様に多面的な観点から研究し、また、昨年度までに行ったシンポジウムなどの成果と一緒に、各自の研

究を論文集の形にまとめ、今年度中に出版するつもりである。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①西川智之「ゲーテの『親和力』」(『名古屋大学大学院国際言語文化研究科言語文化論集』、査読なし、第32巻第2号、2011年、129-147頁)

②上原早苗「トマス・ハーディの本文改変を読む」(『文学 特集=草稿の時代』岩波書店、査読なし、2010年11月号、203-217頁)

③山口庸子「表現舞踊と精神医学—メアリー・ヴィグマンとハンス・プリンツホルン」(『日本病跡学会雑誌』、査読あり、11号、2010年、62-69頁)

④長畑明利「Pound's Reception of Noh Reconsidered: The Image and the Voice」(Ezra Pound, Language and Persona (Quaderni di Palazzo Serra)、査読あり、15号、2009年、p.113-125、)

⑤松下千雅子「「アフリカ」は何処にあるのか—『エデンの園』におけるアフリカ物語と「部族的なこと」」(『ヘミングウェイ研究』、査読あり、第9号、2009年、15-27頁)

[学会発表] (計5件)

①藤井たぎる「20世紀芸術における<境界>」(境界の消失と再生：現代音楽の諸相～シンポジウム・トークコンサート・ワークショップ、2010年12月4日、於：愛知県立芸術大学)

②西川智之「総合芸術観とベートーヴェン崇拜」(シンポジウム 世紀転換期ドイツ、オーストリアの芸術運動、2010年11月3日、於：名古屋大学)

③古田香織「『ユーゲント』における „der Neue Stil“ をめぐって」(シンポジウム 世紀転換期ドイツ、オーストリアの芸術運動、2010年11月3日、於：名古屋大学)

④越智和弘「戦後ドイツ文学はなぜ性を語ら(れ)なかったのか」(日本独文学会秋期研究発表会、2009年10月18日、於：名古屋市立大学)

⑤田所光男「覆い隠された恐怖—アラブ系ユ

ダヤ人に課された共生神話—」(シンポジウム 『恐怖からの思考—現代世界を解明する—』、2008年9月30日、於：名古屋大学)